

桐谷純子の「湯飲み茶碗」

友人に誘われて、桐谷純子の陶器とオリヴィエ・デカルグの写真の二人展のオープニング・パーティーに出かけた。校外にある17世紀末の城館の入り口が展覧会だった。比較的広い会場が人でごった返していた。しかし、桐谷純子の陶器もオリヴィエ・デカルグの写真も、まるで人混みとは関係なく、静かに佇むばかりで譲らなかつた。二人とも、つくることを、そしてそれを一瞬たりとも見逃さずに生きているように思えた。

オリヴィエの写真は、見ること、見続けることを要求する。それに対して、桐谷の陶器はいっけんやさしいが細部の細部まで手が入っていて、それは陶器に触れないと分からないよ、でも触れ方があるよ、と言っているようであった。ぎりぎりまでこねて絞り込み、無駄がないからなのかもしれない。帰り際、湯飲みをひとつもらい、翌日それでお茶を飲んだ。香りがよくこもった。夕刻時に、何気なくワインを入れて飲んでみた。うまかつた。ならばと、コーヒーを、紅茶を、日本酒を、水を、と、とっかえひっかえ飲んでみた。何だか、それぞれの味と香りがこもっててちがう空間に導いてくれるように思えた。しばらくして、ああ桐谷の湯飲みは日常生活を活性化するためにあるいは変容させるために無駄がないんだと分かつた。つよく自己主張しないが、その存在は欠かせないものだ。そしていまやこの湯飲みがなければ一日が始まらないし、終わらない。見かけの寛大さはないが、生活の寛大さがある。

「芸術」作品の中には、まれにものの感じ方、世界の見方を変えるものがあるが、それで生活が変わるわけではなかつた。しかし、桐谷の湯飲みは生活を、その次元を変えてくれたため、何だかものの感じ方まで変えさせられたように思えた。これこそ、「芸術」がなすべきことなのではないか。作品は、展示しでもよいが、日々「展示し」使用しなければいけない。おそらく、桐谷の陶器は国境を越えてつよく生き存在し続ける。

(北山研二、広域芸術論)